# コイガタリ

FafunarV

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コイガタリ

【Ｎコード】
Ｎ８４８９Ｕ

【作者名】
Ｆａｆｕｎａｒｖ

【あらすじ】
小さくつぶやくあなたの言葉に
私は耳を澄ませていた。
ゆったりと流れる時間が二人を包むように

# 潮風　1（前書き）

海蔵　沙耶奈《みくら　さやな》
クラス：2年A組
部活：文芸部
血液型：A型
年齢：17歳
誕生日：3月7日
星座：魚座
好きな事：読書、執筆、水泳、動物と触れ合うこと
苦手な事：イジメ、差別、走ること
家族：父・母・妹
通学手段：自転車
父親が水族館を経営しているお嬢様で箱入り娘。
そのため度々イジメを受けたりカツアゲをされるが親に心配をかけさせられないという理由から話をしない。
読書と動物と触れ合うことが好きで、将来は小説家かイルカのインストラクターを望んでいる。
性格は非常に温厚だが、人見知りしやすく口下手なため友達がいない。
文芸部も幽霊部員気味で放課後は良く海へ出かけては泳いでいる。

# 潮風　1

俺が東京の私立高校からここに転入してから数日がすぎた。
別にどうして学校を変えたかなんてどうでもよかった。
ただ単に有名どころの出だとか気にしたくなかった。
それだけだ。

俺は今独り暮らしだが、
金もないし、傘も忘れたものだから
雨が降るこの季節は痛い。

誰もいない教室には良く雨の音が響いた。
「ちょっといいですか…？」
後ろから声がした。
「ん？」
「ここに白い折りたたみ傘を見ませんでした？
「いや知らないよ。」
「そう…ですか、ありがとうございました。」

その女子は、不思議と変な歩き方をしていた。
こう、足を引きずるような歩き方だ。
彼女が去って数分後の事だ。
「ちっ…どこ行ったんだ海蔵の奴！！」
廊下に別の女子の声が響いた。
よく居るチョー受けるとか連発するタイプの女の声だ。
聞き苦しいったらありゃしない。

「脚蹴ったんだしそう遠くまではいってないんじゃない？沙織…。」
「ばか！！アイツを潰して金を巻き上げねぇと話になんねぇだろ芽

衣！！」
「お嬢様だからっていい気になって！！」
馬鹿でかい声がまた教室を埋め尽くした。
かなりいきり立っているらしい。

「あんな高い折りたたみ傘持って何様のつもりよ！！」
「ねー、生物実験室のゴミ箱なんて酷いけど、面白かったわね～」
「白い傘ってさっきの子が言ってたあの傘か…
こんな田舎にも酷いイタズラがあるもんだな。

俺はしばし外を眺めていたが
どうにも落ち着かないので、
おもむろに生物実験室に向かった。
コツコツと上履きの音が廊下に響いた。
雨は相変わらず止む気配がなく
窓は少し結露していた。

渡り廊下を越えると特別棟に着いた。
文化部の部員がちらほらいるだけで
いたって静かな場所だ。

生物実験室の前まで来た。
コンコンとノックをしたが
返事はなく、ドアも開いていた。

俺はドアノブに手をかけて開くと
強い酸の臭いがした。
俺はゴミ箱を覗くと薬品ゴミのなかに傘を見つけた。
「酢酸オルセインか…血じゃないだけマシだな。」

俺は水で傘を洗い、雑巾で拭いてから実験室を出た。

来た道を帰って教室に向かおうとした時
階段の手すりに掴まって歩く女の子の姿が見えた。
「あ…君。」
教室で見た女の子だ。
俺は持っていた傘を女の子に差し出した。
「あ、あの…これ…どこに？」
「生物実験室だ、それは血じゃないから心配しなくてもいいよ。」
「あの…あ、ありがとうございます。」
「別に、暇つぶしに見つけただけだから礼なんてしなくていい。」
「すみません…。」
そういうと、彼女は一目散に逃げて行ってしまった。

俺はこの雨がやむまでもう少しここに残る事にした。

# 潮風　2

次の日も雨が降った。
朝から雨が降り続き、通学に一苦労だった。
「おはよう総一。」
「ああ、深田、おはよう。」
俺の後ろの深田京平だ。
雨に濡れたのか、机に置いたバッグからタオルを取り出して髪を乾かしていた。
「嫌だいなぁ…早く止んで貰いたいで。」
「そうだな、俺も雨は嫌いだ。」
「誰でもそうだと思うがねぇ。」
「そうか？」
「ああ、たぶんな。」
俺がふと教室のドアに目をやると
昨日の女の子が見えた。
「なあ、あの子誰だ？」
俺が女の子に指を指すと
深田はヒソヒソ話になった。
「あいつは海蔵沙耶奈、一年の時に金持ちだってわかってからずーっと女子のグループからイジメを受けてる。」
「じゃあ昨日も…。」
「ああ、いつもの事だ。」
「そうなのか…。」
「あ、それになあいつは誰が手を差し伸べてやっても誰一人としてそれを受け入れられた奴がいない、いわゆる無駄骨だからな、関わるのはやめた方がいいな。」
「そうなのか…。」

俺は彼女がそんな人間だと全く思わなかった。

担任の笠原先生がドアを開けると同時にチャイムが鳴った。
「へい、最近急に寒くなったからな、風邪が多くなる時期だしきをつけろよ！！じゃ、今日も頑張っていくぞ！！以上！！」

先生が去った後の教室は次が移動教室であってか
普段より雑談に勤しむクラスメイトが見えたが、
海蔵さんと話す人は誰もいなかった。

# 潮風　3

海蔵は教室の片隅で一人読書にふけっていた。
俺は放課後の閑散とした教室の窓から今日もまた外を眺めた。
暇つぶしに携帯音楽プレイヤーを弄っていた。
どうして傘も持って来た俺が帰らなかったかというのも、
それは気分がそうしたと言っていい。

「あの…。」
「…。」
「あのっ！！」
「…。」
「ううっ…。」
「…。」
少し意地悪がしたくなったので、無視していると
海蔵の方から俺の近くに寄ってきた。
「あの…。」
「ああ。」
「その…えっと、き…昨日はあの…。」
「ありがとう、か？」
「はいっありがとうございました！！」
「海蔵、だっけか？」
「…はい。」
「辛かったら俺が相手するから言いなよ。」
「え？…わ…私は…辛くない…ですよ。」
「馬鹿言うな。」
俺はカバンを持って教室を出た。
「馬鹿言うなよ…。」

俺の記憶の何処かが
少し疼いた。

# 潮風　4

翌日、海蔵は休みだった。
「海蔵が休みなんて珍しいな。」
深田はバッグを机に放り投げた。
「そうなのか？」
「ああ、イジメを受けている事を親には言えないんだそうだ。」
「どうして…。」
「無駄に親に心配をかけさせたくないんだってさ。」
「…そうか。」

俺は納得がいかなかった。
と言うよりどうして彼女がそこまで頑張るのか
俺には意味がわからなかった。

「それよかこれから移動だしさ、早くしようぜ」
「ああ。」
俺達が移動を始めると
あのグループが海蔵の机を蹴り倒した。
「ちょームカつく！！マヂサイテーなんですけど！！」
「なにこれ？あいつのノートじゃね？」
「こんなノートゴミ箱行きだっつーの！！」
「あはは？芽衣サイコー？」

「ちっ…。」
「ほっとけって、お前が出しゃばる問題じゃねぇよ。」
「くっそ…。」
海蔵のノートはペットボトルのタレ零しが溢れるゴミ箱に入って行

った。

# 潮風　5

「おい草壁。入ってばかりで悪いが、海蔵の家にこのプリント、持ってってくれないか？」

川越先生は有無を言わさず俺にプリントを渡すと去って行った。

「…まあいいか、帰ってもやる事無いしな。」

とりあえず肝心の海蔵の家がわからない。

川越先生は忙しそうなので、深田に聞く事にした。

階段を駆け下りて俺は深田の部活、柔道部を訪ねた。

「すみません。深田いますか？」

「お！！草壁！！なんだ？」

深田がひょいと顔を出してこちらを見た。

「海蔵の家を知りたいんだけど。」

「海蔵？うーんとな。そうだ！！お前のアパートの近くに寺があるだろ？」

「寺…ああ、あの掘っ立て小屋みたいな。」

「そうそう、そこの階段の前を右にずーっと行った所に御屋敷があるんよ。そこ。」

「ああ、わかったよ。ありがとう。」

「おう、じゃあ俺は戻るから。」

「ああ。」

俺はゆっくりと階段を登って教室に戻ると、山の方に怪しい雲を見つけた。

俺は急にある事に気づいて、徐々に暗くなる空から目を離しプリントをカバンに押し込むと全力で走り出す。

「ヤバい洗濯物干したままじゃないか…。」

とりあえず海蔵より先に自分の洗濯物をどうにかしなくてはならない。

サーッと言う軽い雨音が聞こえ、髪の毛が次第に濡れ始めた。

地面の模様も大きくなり、家に着いた頃にはもう本降りになっていた。

「ハァハァ…あれ？洗濯物がない。」

「ふぉっふぉっふぉ…取り込んでおいたから安心なされ。」

ずぶ濡れの俺に傘を持って来た老爺はここの大家さんだった。

優しいお爺さんでいつもニコニコしている。

「さてと、部屋に上がらせてもらって取り込んだからのぅ。そのまま帰ってよいぞ。」

「ありがとうございます。」

大家さんはまた笑い声をあげて手を振った。

二階の部屋に戻ると綺麗にたたまれた洗濯物が何もない部屋にポツンと有った。

直ぐに脱衣場のタオルを手に取って頭をぐしゃぐしゃと拭き制服を脱ぎ捨て新しい服に着替えた。

「海蔵の家に行かなきゃか。」

プリントをカバンから出した。

『進路アンケート　２年Ｄ組３４番海蔵沙耶奈』と書かれている。

そそくさと家を飛び出し、灰色の空に傘を差す。

パンっと言う音が響いて傘が雨を弾く。

軽快な音と共に歩いてゆくと、深田の言って居た寺を見つけ、その階段を右に進んだ。

しばらく山道を歩いたところが開けていて、洋風の門構えに白い外

壁の御屋敷を見つけた。
「さすが…結構な金持ちみたいだな。」
俺は濡れたインターホンを押した。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8489u/

---

コイガタリ

2012年1月9日01時53分発行